



# 少年センターだより

令和4年11・12月号(第421号)



毎月1日「少年の日」 ☆育て少年心豊かにたくましく! 第3日曜日「家庭の日」 ☆咲かせよう明るい会話, 家族の輪

## 11月は「ココロねっこ運動強調月間」です

毎年11月は「子ども・若者育成支援推進強調月間」であり、長崎県では「ココロねっこ運動強調月間」が実施されます。「ココロねっこ運動」とは、子どもたちの心の根っこを育てるために大人のあり方を見直し、みんなで子どもを育てる県民運動で、平成13年度にスタートして今年で22年目になります。

「子どもたちには、社会のルールやモラルを守って生活してほしい。」子どもに関わる大人であれば誰もがそう思うはずです。社会ルールに必要とされるスキルは、『しつけ』として何度も言い聞かせることも必要ですが、大人の日常的な行動ひとつが子どもにとってのよりよい学びとなり、日常生活に生かされていきます。普段の何気ない行動や言葉遣いを振り返って、なにか少しでも子どもの課題と連鎖するものがあれば、まずは、大人が意識して日常の行動や言葉遣いを改善して行く機会になればよいと思います

今年は、ココロねっこパレードに変わり、ココロねっこ運動研修会を実施することになりました。11月15日(火曜日)にさくらホールで行われる研修会では、地域の子供の健全育成のために、大人がどのように関わればよいのかということを考えていきたいと思います。

## 自転車のマナーアップを!

少年センターは、大村市自転車マナーアップ推進協議会の事務局として様々な業務を行っています。9月の「秋の全国交通安全運動」期間には、児童生徒の登校時間に広報車で市内を巡回し、自転車マナーの向上を呼びかけました。自転車の様子を見守っていると、傘さし運転、信号無視、信号のない道路の横断がありました。これらの違反は、すべて大人の方です。見本になるべき大人が、このような違反をしてはいけません。自分の命を守るだけでなく、歩行者や車の運転手の方にも思いやりの心を持つことが大切だと感じます。



今回の自転車マナーアップ運動では、各中学校の校門付近で活動しました。総勢175名の方に協力していただきました。各中学校の生徒たちにも協力してもらいました。ありがとうございました。大村市は、自転車の交通量が多く、事故也多発しております。それと同時に、自転車の盗難も多いのが現状です。この自転車マナーアップ運動では、自転車の乗り方だけでなく施錠を2ヶ



所する2重ロックも同時に呼び掛けております。9月の二重ロックの状況では、中学校が81.3%、高校が24.2%、大村駅・竹松駅が8%で、無施錠は、中学校が6.5%、高校が26.1%、大村駅・竹松駅が21.7%でした。平坦な土地のため便利に活用できる自転車は、私たちの生活には欠かせません。きちんとマナーを守って運転してもらいたいと思います。

## 令和4年度上半期 市内の補導状況

大村市少年補導委員は、70名おり、14地区に別れて月2回市内を巡回補導しております。4～9月の定期巡回補導では、飲酒・喫煙等の非行問題の報告はありませんでした。今後も子どもたちの健全育成のために補導活動を進めていきます。下の表は上半期の主な指導内容です。

指導内容	人数	指導内容	人数	指導内容	人数	指導内容	人数
自転車マナー指導	99人	ゲームセンターでの声かけ	151人	男女交際	12人	愛の声かけ (下校時等)	282人

### 【おねがい】

補導委員がゲームセンターでの子供の様子を聞くと、小学生が大きな声で騒いで周りの人に迷惑をかけることがあるということでした。ご家庭でも、たくさんの方が集まる場所でのマナーについて話をしていただけないでしょうか。よろしくお願いします。

### ＜連載コラム＞

子どもを見つめるとき、ともすると子どもの外側に現れる行動にばかり目がいきがちですが、このことはそれほど難しいことではありません。しかし、子どもの内側に潜むもの、すなわち心の中、あるいは心の叫びを把握することはとても難しいことです。ご承知のように人間は、悲しいときにのみ涙を流しているわけではありません。陽気にはしゃいでいながら、本当は悲しみをこらえていることも、本当は甘えたいのに反発ばかりしていることもあるのではないのでしょうか。

人間が幸せに生きていく上でもっと大切なもの、それは安定した「愛着」と言われます。

赤ちゃんは0歳の後半を過ぎると人見知りを始めます。つまり、安心できる人と安心できない人との識別を始めるわけです。そして、不安にかられると、お母さんに泣いて訴えてじっと見つめます。ハイハイできるようになると、不安になったらにじり寄ります。「おなかがすいた、おしっこ、うんち・・・」、その都度泣いて訴えます。

月齢を重ねると、だんだんにお母さんとの距離が離れていきますが、戻ってきたときには、子どもたちを「安全基地」的な存在として、ギュッと抱きしめてあげることが大切です。そして、だんだんその場にいなくても内在化できるようになっていきます。

愛着形成のゴールは、人と人との結びつきが確かに築かれ、それは絶対の安全基地となり、無条件に守ってくれるという安心感へとつながっていきます。

「(お母さんに限らず、お父さんや祖父母、自分のことを大切に思いかかわってくれる人等) たった一人で良い。心の支えになってくれる人がいてさえくれれば」・・・、多少のストレスがあってもがんばることができるのです。

愛着の形成はいくつになっても可能なはずですが、子どもたちに、日々「寄り添う」(正対する・受け止める・共感する・愛する・関わる) ことで、子どもたちの「小さな変化を見つめ」、いくらからかでもあるであろう「心の隙間」や「寂しさ」等を一つずつ埋める。そして、そのことが、さらなる愛着形成、ひいては人格形成にもつながっていくのではないのでしょうか。

＜ひびK・I＞



青少年に関する相談は少年センター(月～金 8:30～17:15)へ  
☆相談電話(ヤングテレフォン)0957-49-5263  
☆Eメール相談 : [kiitekudasai@city.omura.nagasaki.jp](mailto:kiitekudasai@city.omura.nagasaki.jp)